

○(北)方向(北東)に走り、西翼は天山方向(西北西)に走つてゐる。著者は一つの重要にして意味深い子午構造線を中央アジアのセリンディア附近で認めた、これはエニセイ河口から起つてエニセイスクの地嶺及び地溝に向つてゐる。此のアジヤを横斷する地構線は内外兩蒙古と天山南北兩路との境界に南下し來り、南山に近い羅布泊と敦煌との間の所謂セリンディアに觸れる。此の線は青海の鹽盆地及び西藏の東境を通じビルマ及びマレーシア弧の方に延びてゐることが暗示される(N)

新著紹介

○生活狀態調査 (其三) 江陵郡 朝鮮總督府調査資料

第三十二輯 菊版四一〇頁 地圖三葉
寫眞版 一四二頁 一月 非賣品

本書は善生永助氏の調査報告で藝に公にされた濟州島及び水原郡生活、狀態調査の續篇である。江陵郡は日本海沿岸の一名郡で古來儒林を以て顯はれ京城からは漢江流域の山地と太白山脈で隔たつてゐるので一小別天地を成してゐる。然かも其の地勢たるや太白山脈の急斜した東側に位して沿岸には平地も少くなく産業も樺漁が榮え、特産としては串柿があり江陵は小京城と俗稱されてゐる。この嶺東の小天地は生活狀態の調査地として誠に興味ある所である。本書は章を分つ六地誌、經濟事情、部落の現狀、生活様式、文化・思想、家計狀態是れである。經濟狀態では各種の統計を擧げて研究資料

を提示してゐるがまゝ單位などに誤りが見えるのは遺憾である。部落の章下では村落に同族部落が多くて人家の密集したものが多く、集團は他地方に比して概して大であると書いてある。家計の章下で農家經濟調査は江陵農業學校長原口良策氏の調査結果を掲げてあるが之によると農家經濟には一般に餘裕も彈力もなく殊に中産階級の疲弊が眼立つてゐる。要するに本書は朝鮮生活狀態の研究資料として大切なものである。須く地理學者はかゝる資料を基として江陵郡の様な種々な地形や地理的位置を抱合してゐる地域内の分割的環境を明亮に現はすべきであると思ふ、紹介者はこの調査書の中に之を求めようとするのではなくてかゝるエラボレートな官廳の仕事を充分採用して地理的考察を行ふのが地理學だと申すのである。(S)

○京郊民家譜

大阪毎日新聞京都支局編
便利堂發行 定價 八圓

大毎の京都版に昨年六月末から、「あの家この家」と題して京の町家の寫眞と解説が出た、其數凡百四十、流石は京は古い都であるから、至る所に古典的な奥ゆかしい民屋が散在する。時世の勢で切角我等の先人が工夫し修飾し居住したこれらの古雅な民居も段々と其形體をかへて行つて、いつのまにか殺風景な鐵筋コンクリートもしくは洋装まがへの市塵が増加してゆけけれども、それでも京はまだ到る所に天明の大火にもやけず、安政の大火にも焼けないのでこつた古建築がある。

たとへ安政や元治に焼けたとしても、その改築に當つて出来た町屋は、火事よりも遙かに古い時代からの流れを汲んでゐた。

一寸した横町をあるいても、古風で大袈裟な胸除けがあつたり、古い行燈や招牌のかゝつた「シニセ」が嚴然として昔を語る。毎日新聞社がさうしたところに着眼して、アノ家コノ家を紙上に寫し出して喝采を博したのは當然であつた、いよ／＼それが河井寛治郎君の見事な装幀につゞまれて、岩井君や加藤君の目次解説を持ち、便利堂の精巧な印刷になつて凡一一〇點、五十五枚のコロタイプ版といふ美本になつた。一枚一枚これを見てゆくと、これは又格別、道を歩いてフト目についた家とちがつて邪魔な他物がないだけに、満目すべてこれ錦繡。花の山に登つていづれかどれと眺めわづらうともいふべき出来映であるのが何よりもうれしい。

ことに町並の大観、入口の工合、さうした個々の邸宅の外に、或は臺所或はニワ、店のかざり、棚の置方さうした細目にわたつた寫眞も多いからこれをみる丈でも興味津々たるものがある。

大京都市出現の紀念出版とも見られることも亦時を得たよい思ひつきであつた、予はかうした圖譜の出現を特に予の平素の道樂の上からも感激せずには居れない、敬て江湖に推奨する。(藤川)

〇諏訪史

第二卷前編 諏訪神社の研究 宮地直一著
古今書院發行 定價五圓八十錢

長野縣の各郡は、いづれも立派な郡誌類を出版して天下に範をしめしてゐるが、本書の如きもその好例であつて、諏訪郡部教育會の活動を語るものである、本書は宮地博士の監修で、知友三上左明氏が執筆された神社史である。専門の大家の著述であるからわるからう筈がない。ことに筆者の如く丹波の諏訪の氏子であるものにとつては、其の本家の元祖の神社が、かやうに科學的に明に論述されたことに特に隨喜の涙を流さざるを得ない。四六倍判三一六頁に附録三〇頁、附圖七一、いかにも堂々たる大冊子である。記事亦親切丁寧を極め、いろ／＼引用した原據について、其のソースを明にし論斷苟もせざるものがある。普通諏訪の大神は古傳によつて出雲からこの地に來られたといふのであるが、本書第三節上下社鎮座の起源といふところではさうした傳説の外に、上代文化の流れが、交通に基くことをのべ、濃尾の平野から御坂を越え、伊那谷を溯つて諏訪に達したといふ交通史的基礎がら諏訪神社の前宮のその前宮が伊那にあつたであらうことを述べてゐるが如きはその一例である。昨夏諏訪に三澤勝術氏を訪ね、湖畔の村落を見たときに、この地方の民家にこの地方の自然が影響した特色なるものを教へられたが、しかしその根本的な居構は決してこの地域の獨自ではなく、南の方の文化の流れ込みが深いといふことを知つた、甲斐から信濃、飛騨へかけての民家に共通性のあることも慥かにその一證であつて北國の民居とはちがつたものがある。本書の著者が交

通路といふものを注意して神社を説くといふ用意に敬服すると共に、猶ます／＼かうした研究が他の多くの神社について試みられることを希望せざるを得ない。予は本書を得て教へらるゝ所の多いことを感じ、多くの郷土研究家に其一讀をすゝめる。(藤川)

○經濟地理世界物産編

寺田貞次編 古今書院發行
定價 五圓五十錢

本書は先輩寺田文學士の最近の著である、著者は小樽商業で久しく商業地理を講じてゐられた經驗もあり高松商業でも經濟地理を講じてゐられるのであるから、その講義をまとめて本書にしられたのである。菊版八百二十頁の大冊である。著者の言によれば本書はアンドレーの商業地理を底本として植物篇、動物篇、礦物篇、工産物について、各品目ごとに世界に於ける産出と消費の狀況をのべてあつて、いづれもあつさり記されてあるから。商品學のよい參考書であらうと考へる、しかし經濟地理學も近頃は段々進歩してきたので、かうした物産論だけでは讀者が満足しなくなつてきてゐる。一々の細かい物産記述よりも、經濟の世界の動き史的發展と將來といつたもの迄も知りたがつてゐる學徒が増加してきた、予は篤學倦むことを知らぬ著者がかうした物産細説から一步をすゝめられて、經濟地理の本論についての講義をまとめて、世に問はるゝ日の一日も早からんことを期待するものである

(藤川)

○地誌學

東本龍七著 古今書院發行 定價五圓五十錢

東大地理教室で熱心に微地形といふものと、居住や耕地との關係を研究し、且之を多くの雜誌に發表して天下の耳目を驚かした東本君は、その最後の收穫として、かくの如き菊版六百頁の大冊子を世に問はれた。古今書院橋本氏も亦よくこの書を出版したと感心させられた、蓋し本書は東本君の今日までの論文を讀んでゐた人には、直ちに何がかいてあるかを理解するに苦しまないであらうが、地誌學といふ名を見て、その名から直ちにそれは地誌即ちある地方地域の古い時代の景觀、居住、風俗もしくは名所舊蹟といったものを學ぶものだと思つてはならぬ。本書は東本君の微地形學的研究を以て所謂地誌を記すに於て科學的基礎たらしめんとする抱負の出現であつて、全く新に世にその當否を問はんがために出版されたものである。故に Chorology といふ語もスタンダード辭典に説明してあるやうに、特に古い時代の國や地域の學といふ風に東本君は之を使用はしてゐない。むしろこれからの變化し、進歩し、複雑化するであらう地域の基礎的研究術を説明せんとしたのであるから、地誌學といふ誤り易しい名をさけて地記學とでもあつた方がよかつたと考へる。勿論著者は歴史的要素を重んじて地誌といふことを念頭に置いてはゐられるけれども、その記す所は斷じて今日までの地誌にはかいてないもので、珍らしいものである少くとも漢書地理志以後の地志といふ正しい概念からかうした本に地誌學といふ名

をつけるのは不當である。故にまづ東木君の地記學とでも見るべきものであつたと思ふがどうであらうか、しかし予はかうした書が出版されうる程に果して世の中が地學を愛好するやうになつた現代の傾向を喜ぶ。(藤田)

雜 報

○昭和五年蘭の産額

農林省發表

養蠶戸數 二百二十一萬五千六百四十五戸、蠶種掃立枚數 千八百五十五萬七千四百十枚

内春蠶 八百四十六萬六枚、夏秋蠶 千九萬七千三百三十枚

繭産額 一億六百四十六萬四千五百十六貫、價額 三億四百二十四萬五千七百六十八圓

内春蠶 五千六百十萬三千三百三十六貫、價額 二億千三百十六萬八千九百九圓、夏秋蠶 五千三十六萬三千三百八十八貫、價額 九千三百八十七萬六千八百五十九圓

にして前年度に比し 養蠶戸數 九五七月(四毛)減、蠶種掃立枚數 五十九萬五千六百九十五枚 三分一厘減、繭産額 四百三十七萬三千三百二十二貫(四分二厘)増

一般に五年度は氣候も順調成績良好にして、右の通り昨年より四分三厘の増加となつた。

今全國府縣別に見るに左表の通りである

府縣別	蠶種掃立枚數	收 入			
		總 數	春 蠶	夏 秋 蠶	高
總 數	一八、五七、四〇一	四、四四、五三六	一、〇〇、三三〇	三、四四、二〇六	三、四四、二〇六
北海道	八、四八一	三、八三三	一、〇〇、三三〇	二、八三三	二、八三三
東北區					
青 森	一九、四二八	一、六、九七四	八六、六〇〇	三〇、三〇四	三〇、三〇四
岩 手	一七、四四五	一、〇、九五一	八四、六九七	二九、七六六	二九、七六六
宮 城	二六、七三〇	一、八七、七九	一、〇〇、六三三	七六、七六六	七六、七六六
秋 田	五、〇七三	三、六五一	三三、〇〇〇	二、八、六三	二、八、六三
山 形	四、二六〇	二、六九、五一	一、五八、五二	一、〇九、九八〇	一、〇九、九八〇
福 島	七、九七九	三、九七、六五	二、三六、三六九	一、七〇、七六六	一、七〇、七六六
關 東區					
茨 木	七二、四四四	三、八八、四六六	二、〇〇、八六九	一、八七、五九七	一、八七、五九七
栃 木	一九、五五三	一、〇七、〇〇〇	五九、五九四	四七、四〇六	四七、四〇六
群 馬	一、五九、三四	六、七四、三六〇	三、五五、三三九	三、一九、〇二一	三、一九、〇二一
埼 玉	一、九一、〇〇九	五、〇六、二二七	二、九六、四四四	二、一〇、七八二	二、一〇、七八二
千 葉	四、元、六二四	二、四四、七九	一、三〇、七四二	一、〇四、〇四七	一、〇四、〇四七
東 京	三、四八、八七	一、七六、四四七	八六、二九	八六、六六八	八六、六六八
神奈川	三、〇、六二七	一、八二、六六一	一、〇四、二六七	八六、六六八	八六、六六八
北 陸區					
新 潟	一、〇、四四四	一、六七、〇六四	一、〇七、六六四	五九、三九九	五九、三九九